

〈研究余滴〉真の日本史とは

NAKANO, Hideo / 中野, 栄夫

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学

(巻 / Volume)

63

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

2005-03-24

〈研究余滴〉

真の日本史とは

はじめに

どこの大学の史学科の講義科目にも必ず「日本史概説」と銘打つ講義がある。そして、それは「古文書学」とともに、史学科の長老クラスの教員が受け持つ講義科目と意識されていたといつてよい。そんな「日本史概説」をいつしか私も担当するようになっていた。といつても長老というわけでもないのであるが、役割分担ということでもまわってきたのである。しかし、私には「概説」を持てるほどの力はなかった。そこで、当初は自分の専門に引きつけつつ一応は概説らしくなるよう、広い時代をカバーするようにつとめただけのものであった。そのうち、徐々に概説の大切さが理解できるようになり、教材の工夫をするなどして、一応は「日本史概説」らしき講義内容になってきた。そしてやがて、今まで学んできた、そして自分が講義している「日本史」とは、本当の日本史なのであるのかという疑問を持つようになった。といふのは、アイヌあるいは沖繩（琉球）の歴史はほとんど出てこないか

真の日本史とは（中野）

中野栄夫

らである。つまり、今まで私が学んできた、そして私が講義してきた「日本史」はあまりにも「ヤマト」中心、稲作中心であったのではないかと、ということである。

「日本」を構成するものとしては、「ヤマト」の他に、歴史的に見れば、蝦夷・アイヌ、琉球・沖繩の存在等がある。そして、それは今日でも、未解決の問題として残っている。この両者はたんに地域の問題として片づけられない問題を抱えている。そんなことに気づいて後は、東北地方の蝦夷関係史跡・施設、あるいは沖繩の史跡・施設を回ったりして、講義の中で写真などで現地を紹介しつつ、その歴史を講義に取り入れるよう私なりに努力してきた。

そんな意識を持つようになった時、「日本学」ということを、考えるざるを得ないような状況になり、「日本とは何か」、「日本人とは何か」を考えるようになった。そして、一応の自分なりの考えを持つようになった時、『朝日新聞』二〇〇三年八月二日の「Be on Saturday」版の「ことばの旅人」欄「ドーデ「最後の授業」」

に記されている、つぎのような記事に遭遇したのである。

私たちには、日本語を集団として奪われた記憶がない。逆に隣国の民に自分たちの言葉を強制した過去を持つ。

私はこの文章を読んであぜんとした。

まず、右の文章のうち、「逆に隣国の民に自分たちの言葉を強制した過去を持つ」という部分は、とくに異論はないであろう。日本は、台湾・朝鮮半島を併呑し、その人々に日本語を強制した過去を持っているからである。しかし、「日本語を集団として奪われた記憶がない」という部分には、とても従えないのである。そこで以下、そのことについて述べようと思う。

一 方言札

沖縄の八重山諸島にある竹富島に喜宝院蒐集館という資料館がある。喜宝院は西本願寺派の寺院で日本最南端の寺として知られている。蒐集館は、先代住職上勢頭亨氏が収集した竹富島の歴史・民俗資料を展示している資料館である。人頭税関係などの貴重な資料を有しているが、その中に「方言札」と書かれた木製の札がある²⁾。写真は現住職上勢頭芳徳氏のお許しを得て撮影したものであるが、上勢頭氏の説明によると、学校で子供が「沖縄方言」を使うと、これを一日中首から提げさせられたといひ、昭和三十年頃まで実際に使われていたという。要するに、沖縄では「沖縄方言」を使わずに、「標準語」を使うことが励行されていて、学校では、「沖縄方言」を使った生徒に対して、「方言札」を首から提げるといふ罰則が科せられていたのである。上勢頭氏の説明によ

ると、伊江島では、鉄板で作った大きな方言札が使われていたという例もあるという。(付記参照)

ここで、思い起こされるのが、戦前におきた「方言論争」である。「方言論争」について、ここで詳しく述べることは避けるが、概略はほぼつぎのようなものである。

一九四〇年（昭和十五）一月に沖縄に渡った柳宗悦ら日本民芸協会同人らが、沖縄観光協会、郷土協会主催の座談会に招かれたが、その席上、「標準語を知ることがぜひ必要なのは異論がないが、琉球言葉を大事にしなければならない」と、当時沖縄県当局が進めていた標準語励行運動に行き過ぎがあると指摘したのである。それに対して、同席していた県当局や警察部長らが反論、また反発した県側が、宗悦たちを防衛施設を無断で撮影したという理由で拘引し尋問するという挙に出たこともあって騒ぎが大きくなり、沖縄と本土（ヤマト）の両方を巻き込んで、ほぼ一年にわたって新聞紙上で論争が展開され、中央のジャーナリズムまで巻き込む事態に発展した。これがいわゆる「方言論争」である。³⁾

要するに、沖縄の人たちは、自分たちの言語である「沖縄方言」



を使用することを禁じられ、標準語すなわち「日本（ヤマト）語」を使うことを強要されていたのである。

二 フチの話

アイヌの人々が日本語を話すようになって、アイヌ語は「死滅」の危機に瀕していたが、最近では、アイヌ語を保存しようという動きや、さらに進んでアイヌ語を日常的に使用しようという運動もあり、「死滅」はとりあえずまぬがれている。

今、「アイヌの人々が日本語を話すようになって」と記したが、それは正しい言い方ではない。沖繩の人たちが、標準語すなわち「日本（ヤマト）語」を使うことを強要されたのと同様、アイヌの人々も、「日本（ヤマト）語」を使うことを強要されていたのである。その辺の事情を知ることができるのが、弟子シギ子さんのつぎのような発言である。

エカシヤフチ達が私達子供をさせて、こそつと話している言葉がとても好きで覚えたくて、教えてほしくて、いくら頼んでも教えてもらえませんでした。

昭和二十年頃になってから、フチに聞いた事がありました、どうしてあんなにアイヌ語を教えるのを拒んだのか、誰もいない時にでも、こそつと教えてくれても良かったのにーと不満を言った事がありました。

フチはしばらく黙って考えておりましたが今ならもう話してもいいからと思うから言うけれど、思い切った様に話始めました。

真の日本史とは（中野）

昔は子供達にアイヌ語を教えても、習っても駄目だったんだよ、学校でも子供達がアイヌ語を使うと体罰を受けたんだよ、うっかりして二度目にアイヌ語を使うと今度は親も学校に呼び出されて、きつく叱られたり時には体罰を受ける事も有ったそうです。三度目になると、コタンの人を全員集めて主だった人達に体罰をするか、罰金を取るかアイヌの男の人が一年中働いて得たアイヌが宝物としているシントコ（行器）など取ったり毛皮など要求されたりしたとの事でした。実際に子供達がアイヌ語を話していない時でも、毛皮や鮭、昆布などが欲しくなると、子供をおどしてアイヌ語を喋らせては何回も品物を要求に来るので、出さなければ何をされるかわからないのでコタンの人達全員で何か少しづつ出し合っただけで良かったことも時々あったそうです。

フチはあたりを注意しながら、私達だつてこそつと教えた事だつてあるが、でもね、知らない言葉はおどされても言えないけれど、知っていれば、何かの時にはついに口から出てしまふものだから、皆んなと相談をして、子供達の前では、アイヌ語を喋らない事に決めて、親達も日本語を一生懸命に習って子供達にもアイヌ語を使わせない工夫をしたそうです。（これは明治の末から大正にかけての事だった様です）

この文章について、コメントは必要としないであろう。沖繩の人たちが、自分たちの言語である「沖繩方言」を使用することを禁じられ、標準語すなわち「日本（ヤマト）語」を使うことを強要されていたのと同様、アイヌの人たちは、自分たちの言語であ

るアイヌ語を使用することを禁じられ、「日本（ヤマト）語」を使うことを強要されていたのである。

弟子シギ子さんは「ムックリは上手になったが、アイヌ語を話せないのは残念でならない」と、寂しそうに語っていた。

三 「日本語」の強制

以上のことを考えに入れてもう一度、先に示した「朝日新聞」の、

私たちには、日本語を集団として奪われた記憶がない。逆に隣国の民に自分たちの言葉を強制した過去を持つ。

という文章を読み直してみよう。

ここでいう「私たち」がヤマトを指すのなら、きわめて自然な指摘ともいえないことはない。しかし、私の理解では、今の「日本」を構成する人びとは決して単一民族ではない。明治までは日本に含まれていなかった琉球は沖繩として日本に包摂され、またアイヌの人びとも「旧土人」として日本に含まれた。そして、沖繩（琉球）の人は、「沖繩語（琉球語）」ではなく「日本語」を強制され、またアイヌの人びとは、自分たちが話していたアイヌ語を取り上げられ、「日本語」を強制された。このように、沖繩（琉球）・アイヌの人びとは、自分たちの言葉を集団的として奪われ、日本語を使うことを強制されたのである。

琉球語を日本語とは別のものと考えるか否かについては見解の相違もあるが、歴史的にみた場合、少なくとも、琉球はヤマトとは別の王権を樹立していたわけで、アイヌと同様、別の民族と

いふべきと私は考えている。つまり、明治以前は、琉球もアイヌも別の民族であり、ヤマトとは別の存在であったといわなくてはならない。そのような歴史を顧みれば、「朝日新聞」の記事のようなことはとても書けようもないはずである。

四 高等学校教科書

ここで、高等学校で使う日本史教科書について見ておこう。受験生がよく利用する山川出版社の「詳説 日本史」で、前近代で沖繩（琉球）、アイヌが出てくるのは、つぎのような記述としてである（補注・ルビは省略）。

琉球と蝦夷ヶ島 沖繩では、このころ北山・中山・南山の3地方勢力（三山）が成立して争っていたが、一四二九（永享元）年、中山王の尚巴志が三山を統一し、琉球王国をつくりあげた。琉球は明や日本などと国交を結ぶとともに海外貿易をさかんに行った。琉球船は、明・日本・朝鮮だけでなく、南方のジャワ島・スマトラ島・インドネシア半島などにまでその行動範囲を広げ、東南アジア諸国間の中継貿易に活躍したので、那覇は東アジアにおける重要な交易市場となり、琉球王国は繁栄した。

いっぽう、すでに一四世紀には畿内と津軽の十三湊とを結ぶ日本海交易がさかんにおこなわれ、サケ・コンブなど北海の産物が京都にもたらされた。やがて南から津軽海峡をわたった人びとは蝦夷ヶ島とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に港や館を中心にした居住地をつくった。彼らは和人

といわれ、津軽の豪族安藤氏の支配下に属して勢力を拡大した。ふるくから北海道に住み、漁り・狩りや交易を生業としていたアイヌは和人と交易を行った。和人の進出はしだいにアイヌを圧迫し、たえかねたアイヌはやがて一四五七（長禄元）年、大酋長コシヤミンを中心に蜂起し、和人居住地はほとんどせめ落とされた。わずかに上之国の領主蠣崎氏のみがもちこたえ、それ以後、蠣崎氏は道南地域和人居住地の支配者に成長し、江戸時代には松前氏と名のつて蝦夷地を支配するようになった。

朝鮮と琉球・蝦夷地（中略）琉球王国は、一六〇九（慶長十四）年薩摩の島津家久の軍に征服され、薩摩藩の支配下にはいった。薩摩藩は、琉球の土地にも検地・刀狩を行って兵農分離をおし進め、農村支配を確立したうえ、通商交易権も掌握した。さらに、琉球王国の尚氏を石高八万九〇〇〇石余の王位につかせ、独立した王国の姿をとらせて中国との朝貢貿易を継続させた。琉球は国王の代がわりごとにその就任を感謝する謝恩使を、また將軍の代がわりごとにそれを奉祝する慶賀使を幕府に派遣した。

蝦夷ヶ島の和人居住地（道南部）に勢力を持っていた蠣崎氏は、近世になると松前氏と改称して、一六〇四（慶長九）年徳川家康からアイヌとの交易独占権を保障され、藩制をしいた。和人居住地以外の広大な蝦夷地の河川流域は、商場あるいは場所とよばれ、そこでの交易取入が家臣にあたえられた。アイヌ集団は、一六六九（寛文九）年シャクシャインを中心

真の日本史とは（中野）

に松前藩と対立して戦闘になったが、松前藩は津軽藩の協力を得て鎮圧した。このシャクシャインの戦いを最後に、アイヌは全面的に松前藩に服従させられ、さらに享保元文期（一七一六―四〇）までには、多くの商場が和商人の請負となった（場所請制度）。

さて、前者は室町時代の叙述の東アジアとの交易について、記されているものであり、後者は鎖国政策や長崎貿易について記されたものである。要するに対外交渉史を記述する部分で、「ちなみに」的にトビツクの、記されたものである。この記述だけで、琉球・アイヌの歴史を理解することは到底できまい。

まとめ

以上のことを見ると、私たちが通常考えている「日本史」は、真の日本史とはいえず、「日本（ヤマト）史」ではないというべきであろう。

ちなみに、沖縄では『高等学校琉球・沖縄史（新訂・増補版）』という歴史教科書の書物が出版されていて、それは高校生のみならず、県民の方にも読まれている。その「はじめに」に、つぎのような記述が見られる。

……、「琉球史は日本史にとって外国史の研究である」といわれるように、沖縄歴史は単純に日本史の一地域としては位置づけられない。それどころか、沖縄歴史を日本史にくみこむことよって、従来の日本史像をうちくずす、あらたな歴史の枠組みづくりをになうことさえできるのである。

これは、沖繩（琉球）の歴史についての記述であるが、アイヌについても同様な指摘ができるであろう。

沖繩（琉球）・アイヌの歴史を正統に組み込まない限り、真の日本史とはいえないであろう。

注

(1) 司馬遼太郎『街道をゆく6 沖繩・先島への道』（朝日新聞社）に上勢頭亨氏のことが出てくる。ただし、名字を「かみせど」と読ませているが「うえせど」が正しい。

(2) 寸法は天地17.0×横肩5.06.5 cm

(3) 以上、「沖繩タイムス 創刊五〇周年企画 戦後新聞の足跡」(一九九八年二月二十四日 朝刊 八面)、および「エコナビ」四五号「風土に根ざす手仕事の再考」柳宗悦に即して「参照(インターネットより)。ただし、当時の沖繩の言論界では、戦争遂行体制のために(ヤマト化)はやむなしという流れが支配的になっていたせいか、宗悦たちの発言に対しては、「ヤマトの特権階級の文化人がいい気なことを言っている」といった反発が強く、噛み合った論争にはならなかったという(同上)。

(4) 弟子シギ子さんは、北海道阿寒町阿寒湖温泉に住んでおり、ムックリの名手として知られている。

(5) 弟子シギ子「先祖 祖父母に感謝」(関東ウタリ会創立二十五周年記念・交流後援会プログラム)より。「エカシ」とは長老、「フチ」とは長老的女性のことをいう。

(6) ここで用いたのは一九九八年三月発行版。

(7) 編集工房 東洋企画 発売。

【付記】

テレビドラマ「ちゅらさん」でおなじみとなった沖繩の女優・平良とみさんが子供のころ、学校ではウチナーグチ(沖繩方言)を使わず、標準語(「日本(ヤマト)語」)を使うようにいわれていた。平良さんはお母さんのことを「あやー」と方言でいって、教室で立たされたことがあるという(「朝日新聞」二〇〇五年二月一日「朝日子供新聞」欄)。

上勢頭芳徳氏から、最近になって「方言札」の探訪カードのコピーをFAXで送っていただいた。それによると昭和三五年生まれの女性が小学校三〜四年の頃まで「方言札体験」をしていたという事例が報告されている。(以上、校正に際して)